慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会主義と国家（二）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.343(31)- 363(51)
JaLC DOI	10.14991/001.19230301-0031
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ば足りる。此の組織が何人に屬するや、營利の動因によつて活動してゐるか否かは問はないものである。

（一）商業を此の組織の意味に初めて解釋したのは余の知る限りに於てBurriと、次でHirschが一九一五年Grundriss der Sozialökonomik中の一部Organisation und Formen des Handels und der staatlichen Binnenhandelspolitikに此説を承け繼いたものである。最近ではPhilippovichのGrundriss der politischen Oekonomieの政策編をSommaryが昨年其第十版を出すに際して舊定義を棄て、而して此の新定義を少しく訂正して採用してゐる。

以上の諸學者が組織を如何に解釋し、從來の商業の概念を如何なる程度迄擴張せんとするものであるかは只其定義丈では明かでないけれども、余自身は商業を以上の如く解釋せんとするものである。

茲に於てか商業は直接交換時代には行爲概念として解釋し、資本主義時代には之を營利的、私經濟的、所有權的、系統的、人的職業的概念として解釋し、高度資本主義社會的特徴ある今日の經濟組織の下では之を社會經濟的、系統的、職分的、組織的概念として解釋し、解釋す可きものであると信ずる。經濟組織の急變しつゝある際にいつまでも從來の古き定説に囚はるゝは余の採らない所である。（終）

社會主義と國家（二）

小泉信三

（五）

上記「哲學の貧困」及び「共産黨宣言」の中に、階級別の廢止せられた曉に於ては「眞の政治的權力なるものは最早なくなるであらう」。「公的權力die öffentliche Gewaltは其政治的性質を喪失する」と謂つて居るのは果してどれ程の事を意味するかと云ふに、Marx-Engelsの意が縱令「政治的權力」と國家其者とを同一視するに至らぬまでも、前者が後者の本質に缺くべからざる要素であつて、政治的權力のないところには國家も亦存せぬと謂ふに歸着することは、二者の此時以後の諸著作に徴して明かに之を知ることが出來る。（就中一八七三年Engelsが伊太利の一社會主義雜誌に寄稿して無政府主義者の説を駁した文の一節に「凡べての社會主義者は、將來の社會的革命の結果として、國家、並に國家と共に政治的權威die politische Autoritätが消滅

ずべきこと、即ち公的職分が其政治的性質を喪失して社會的諸利害を監視するたゞの管理的職分に化すべきことを認める點に於て一致して居る」と記して居るのは、絶好の註釋たるものである。Zitiert bei Lenin, Staat und Revolution, Verlag Die Aktion 1918 56-7)

既に無產階級の努力の目標は、階級別、階級的對抗の撤廢であつて、而して階級的對抗の廢せられたところでは、政治的權力なるものも亦存せぬとすれば、社會主義運動終局の目的が社會主義國家又は民主的國家の實現にあると云ふやうに說くのは、Marx-Engels の眞意を正しく傳へるものではない。無產階級が完全にブルジョアジイの支配から解放せられ、プロレタリヤ、ブルジョワジイなる階級對抗の廢止せられた曉に猶ほ存するものは、最早何等の國家ではなかるべき筈である。然るに Marx の門下にして獨逸社會民主々義勞働黨の一創立者たる Wilhelm Liebknecht は、その編輯に係る黨の機關紙の爲めに „Der Volksstaat“（「庶民國家」）なる名稱を撰び、又此に揭げられた論說も亦斯る國家に就て論ずることが屢々であつた。これは固より Marx-Engels の喜ばぬところであつて、Engels はその一八七六―七年の著作たる Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft の一節に於て、Liebknecht の名を擧げては居らぬが、その主張する庶民國家の說を駁し、資本主義社會が其發達の頂點に達し、勞働者階級が政權を掌握した後に國家が何うなるかを明記して居る。(Eduard Bernstein, Der Sozialismus einst und jetzt, 1922, 83-4) 彼れに從へば國家は死亡すると云ふのである。其原文に謂ふ「プロレタリヤは國家權力を掌握して、生產用具を不取敢先づ國有に移す。併し乍らこれと共に、プロレタリヤは己れ自身のプロレタリヤたることを廢止し、それと同時に一切の階級別及び階級對抗を廢止し、且つそれと共に國家を國家として廢止する。從來の、階級對抗內に於て動いてゐた社會は、國家を必要とした。即ち其時々の搾取階級の其の外的生產諸條件を維持する爲めの組織、即ち特に被搾取階級を現存生產方法に由つて與へられた抑壓條件（奴隸制、體僕又は隸農制、賃銀勞働）內に抑制する爲めの組織を必要とした。國家は全社會の公式代表者、全社會の具體的綜括であつた。併しそれは國家が、其時々に於て自ら全社會を代表した階級の國家たる限りに於てのみさうであつた。古代に於ける奴隸所有市民の國家、中世に於ける封建貴族の國家現時に於けるブルジョ

ワジイの國家はそれである。國家は最後に事實上全社會の代表者となることに依り、自ら己れ自身を不要のものたらしめる。國家が最早如何なる階級をも壓迫することを要せぬに至るや否や、階級支配及び從來の生産無政府狀態に基づく個人的生存競爭と共に、之より生ずる衝突と放逸とがまた同じく除去せらるゝや否や、最早抑壓すべきものがないから、特別の抑壓權力、即ち國家も必要でなくなる。國家が眞に全社會の代表者として行ふ最初の行爲――社會の名に於てする生産用具の掌握――は、同時に其國家としての最終の獨立行爲である。國家權力の社會的關係に對する干渉は、各方面に於て逐次無用に歸し、而して次いで眠りに落ちる。物の管理と生産過程の指揮 die Verwaltung von Sachen und die Leitung von Produktionsprozessen とが人間に對する統治に代る。國家は『撤廢』せられずして死亡する（Der Staat wird nicht „abgeschafft," er stirbt ab）。『自由なる庶民國家』の成語はその一時的煽動的に用ゐらるゝことの許容せらるべきことも、その終局的學問的に不充分なることも、共に此事に照らして判斷すべきである……。」（S. 301-2）

國家の死亡若しくは消滅なる語は、既にこれより前にも Engels に依つて用ゐられて居る。一八七五年三月（一八――二八日）彼れは August Bebel に書を與へて、其年の Gotha に於ける社會黨大會に提出せらるべき綱領草案を批評した一節に、次の如く記して居るのである。曰く、「……自由なる庶民國家は自由なる國家に變つて居る。文法的に解すれば、自由なる國家とは國家が其市民に對して自由なる場合の國家、即ち專制政府を有する國家である。國家云々は全然捨てなければならぬ。最早固有の意味では國家ならぬコンミユウン以來殊に然りである。既に Marx の排 Proudhon 論及び後に共産宣言が社會主義的社會秩序の開始と共に國家は自ら解散し消滅することを明言して居るにも拘らず、『庶民國家』は無政府主義者に依つて嫌になる程吾々の口中に投げ込まれて居る。然し乍ら國家は人が鬪爭に於て、革命に於て、反對者を强制的に壓迫する爲めに利用する一の一時的制度に過ぎぬものであるから、自由なる庶民國家と云ふのは全然無意義である。プロレタリヤはその猶ほ國家を利用する限りは、自由の爲めにでなくて、反對者を抑壓する爲めに之を利用するのである。而して自由と云ふことを云ひ得るに至るや否や、國家は國家としては存立を已めるのである」と、而して Engels は國家（Staat）なる文字に

代ふるに佛語の commune に相當する Gemeinwesen なる語を以てすべきことを提議して居る。(Bebel, „Aus meinen Leben" zitiert bei Lenin, Staat und Revolution, 59)

（六）

Marx 自身は、遂に當初の計劃通り、系統的なる國家論を完成するに及ばずして終つたので、彼れの國家觀を窺ふ爲めには、彼れと Engels との樣々の時代に於ける著作から幾多の斷片的發言を拾綴し來つて之を整理排列するの勞を取らなければならぬ。これが Lenin に Staat und Revolution の著ある所以であるが、同じ斷片的發言の中にあつて比較的稍〻詳細、稍〻系統的に國家の本質を論じてゐるのは、Marx の死後に著された Engels の Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates 1884 である。國家に關して Engels が此書中に記すところが、右記引用章句と措辭用語の上に於て多少趣を異にする點があることは認められるが、畢竟國家は階級鬪爭の行はるゝ社會を基礎として其上にのみ發生存立し得るものであつて、此基礎の撤去と共に國家も亦消滅しなければならぬものであること、而して現に行はれて居るブルジョワジイ對プロレタリヤの對抗鬪爭は、有ゆる階級鬪爭の最後のものであるから、プロレタリヤの解放と共に國家は必然消滅せざるを得ぬ性質のものであることは充分明確に其中に說かれて居るのである。

氏族制度崩解の跡に起つた國家の三主要形態（雅典國家、羅馬國家、獨逸國家）に就て細說した後、「野蠻と文明」と題する本書の最後章の一節は記して謂ふ、「されば國家なるものは決して外部から社會に强制せられた威力ではない。また同じく Hegel の主張するやうな『道德的理念（イデエ）の實現』『理性の影像、理性の實現』でもない。國家は寧ろ一定の進化階段上に於ける社會の一生產物である。それは此社會が社會自身に對して解き難き矛盾に陷り、調和すべからざる對抗に分れ、而して自ら此對抗を排除する力がないことを告白するものである。併し乍ら此敵對が、即ち經濟的利害相衝突する階級が、無效の鬪爭に於て己れと社會とを消盡することなからしめんが爲めには、一見社會以上に立つ一威力の此衝突を鎭壓し、之を『秩序』の制限內に保持するものが必要となつた。而して此の社會から生じて、併し乍ら社會の上に立ち、漸次に社會から離隔するところの威力が即ち國家である。」然るに「國家は階級敵對を抑制する必要から生じたものであるから、併し乍ら同時にそれは此等階

級衝突の最中に發生したものであるから、それは通常最も勢力の强い、經濟上の支配階級の國家であり、而して此階級は國家に由てまた政治上の支配階級ともなり、斯くして被壓迫階級を抑壓搾取する爲めの新手段を獲得するのである。即ち古代の國家は、先づ第一に奴隷所有者の奴隷抑壓の爲めの國家であつたことは、封建國家が貴族の體僕隷農を抑壓する爲めの機關であり、また近世の代議國家が資本によつての賃銀勞働搾取の道具であるのと同じである。……「されば國家は永遠の昔からあるものではない。國家あるを俟たず、國家及び國家權力なるものを全く知らざる社會はあつたことがあるのである。社會の階級的分裂に必然結び付いて居る經濟的發達の一定階段に於て、此分裂の爲めに國家は必要となつた。吾人は今速かなる歩武を以て、是等階級の存在が曾に必要でなくなる許りでなく、生産に對する一の積極的障碍となる或る生産の發達階段に近づきつゝある。是等階級はその背て避く可からざる約束を以て發生したやうに、同じく避く可からざる約束を以て消滅するであらう。これと共に國家も亦必然的に消滅する。生産を生産者の自由平等なる聯合（アソシアチオン）を基礎として新に組織する新社會は、國家機關を擧げて其時その當さに居るべきところ、即ち古代博物館内の紡車と青銅斧との傍に移し置くであらう」と。（Der Ursprung der Familie, 12. Aufl. 177-6, 180, 182）

（七）

以上引用せられた數次の言明に由つて、Marx-Engels の最高目標を指すには、民衆國家と云ふも、自由國家と云ふも、兎に角國家の文字を以てするの當らぬことは、充分明白にせられたものと信ずる。Bebel が前記の如く Engels の敎を受け、且此敎へに服する旨を答へながら、猶且その Unsere Ziele の中で、國家は之を階級支配に基づく國家から一の庶民國家に變形せしめなければならぬと記して居るのは Lenin の指摘して居る通り、甚だ師說に不忠實なるものとの批評を避けることが出來ない。(Staat und Revolution, 61) Kautsky が屢々「未來國家」Zukunftsstaat を論ずるのも（Das Erfurter Programm 第四章を看よ）縱し彼れは、左記の如く、階級國家の外に國家なきことを充分理解してゐたとしても、猶ほ甚だ不用意の譏りは免れないのである。無政府主義者とマルクス主義者とは簡單に一方は國家を否認し、一方は國家を容認するものとして之を區別すべきものではない。Marx の國家學說を誤解曲說より恢復せ

んことを期する Lenin が「吾人は目的としての國家撤廢の問題に於ては、毫も無政府主義者と所見を異にすることなし」と言明して居るのは (a. a. O. 55 passim)、正しく師説を傳へるものと云つて好ゝのである。併し此點を力説し、且つ斷乎たる明言を以て曖昧を一掃したのは確かに Lenin の大功であるが、苟も Marx-Engels の著作に通曉して居るものならば、彼等が階級的抑壓の機關としての外に國家なしとの説を屢々反覆してゐるのを看過しようとは思はれぬ。而して從來の歴史は階級闘爭の連續であつたが、ブルジョワジイに對するプロレタリヤの勝利を以て一切の階級別、階級敵對は廢止せられ、人類の全く新しい歴史が其時から開けると云ふことは、「共産黨宣言」「空想より科學への社會主義の進化」を讀んだほどの者が之を忘れる筈がない。既に階級國家の外に國家なしと云ふ斷定を嚴格に解釋して、而して將來全然階級別のない社會が實現されるものとして考へて見れば、當然其曉には國家も亦最早存在せぬものと論結しなければならぬのである。故に固より Marx-Engels の最高目標が無國家の社會であることは Lenin が指摘するまでマルクシストが之を知らずに過ごして來たのではない。前記の如く Kautsky は「未來國家」に就て云々する許りでなく、國家其者の本質に關する其説明は時として甚だ不充分不明確なるを免れないが、而かも猶ほ Das Erfurter Programm の中でも、國家と云ふ國家は、何れも「第一には支配階級全體の利害を保護する爲めの道具」に外ならぬと云ひ、又勞働階級が國家内に於て支配階級となつたとき始めて國家は一の資本的企業たることを已めるであらう。其時始めて之れを一の社會主義的組合 (sozialistischen Genossenschaft) に改造することが可能となるであらう。」社會民主黨は「勞働階級が政權を獲得し、それに由つて國家を變じて一の大なる大體に於て全然自足的なる經濟組合 (Wirtschaftsgenossenschaft) たらしめんことを欲するものだと云つて居る (16. Aufl. S. 124, 125-6) 許りでなく、「更に別の機會には明かにマルクス主義者の目標の無政府主義者の目標と甚だ相近接するものなることをも説いて居る。即ち Neue Zeit 誌上 (26 Jahrgang (1907-8), Heft 49) に豫算承認の問題を論ずる中に彼れは次のやうに説いてゐるのである。

「豫算承認の問題に於て吾々の出發點となるべき原則は、吾々の國家觀である。吾々は國家を階級支配の一機關と認め、政府を支配階級の手代と認めて居る。此

點に於て吾々は國家を目するに階級以上に浮動する不偏不黨の一威力を以てする國家社會主義者と異なり、反對に吾人は吾人の國家觀に於て無政府主義者と相接觸する。併し無政府主義者は吾人の國家より離れ居るべく、國家との如何なる接觸をも避くべきことを論結するが、吾々は此事の不可能なることを言明する。又吾々は國家を單に非政治的活動に由つて止揚することのまた同じく不可能事なることを認めるものである。寧ろ吾人は國家權力を征服し、之を有產階級の機關から無產階級の機關に、抑壓の機關から解放の機關に變化せしめることに吾人の任務を認めるのである。

更に彼れは一八九一年社會民主黨の新綱領案を評した中に次の如く記して居る。「科學的社會主義は國家が階級支配の機關に外ならざることを認めて居る。：：されば階級國家なる表現は吾人の見るところを以てすれば撰擇宜しきを得て居らぬ。抑も階級國家以外の國家があるか。人は『庶民國家』を指摘する。此語に由つて人はプロレタリヤに征服せられた國家を解するが、併しこれも亦一個の『階級國家』である。プロレタリヤは他の諸階級を支配するであらう。尤も一つの大なる差別はある。プロレタリヤの階級的利害は一切階級別の廢止を要求するのである．．．．」(Zitiert bei W. Mautner, Bolschewismus, 1920, 146)。斯く階級國家の外に國家はなくて、而してプロレタリヤは一切階級別の廢止を要求するものとすれば、其要求の實現せられた曉に國家が存立すべからざることは論を俟たぬであらう。

Leninは社會民主主義者の往々「吾人は國家を認め、彼等は國家を否認する」と云ふ點に無政府主義者との立場の相違を求めることのMarxの眞意に反するものなることを痛論し、國家存廢の一事に就ては Marx-Engels も無政府主義者と其目標を異にするものではなくて、兩者の說の岐れるところはたゞ此目標に到達する爲めの手段行程の上にあることを力說したが、これは從來のMarx註釋家の曖昧を明確にし、その閑却せるものを重要視したのであつて、全然新奇獨創的なるMarx解釋では勿論ない。後に紹介すべき國家消滅の過程に關するLeninの解釋には獨特の工風が窺はれ、從つて此點に對しては異說あることを免れまいが、右に揭げた問題の範圍內に於ては彼れの所說に疑義を介むべき餘地はないと云つて好いのである。

Marxは始めHegelの國家觀を以て出發しながら、Hegelとは全く相容れぬ結論

に到達した。Marxに取つては國家は最早「自由の實現」「理性の影像（ビルド）」ではない。Hegelに從へば國家は益々完成の域に向つて進み、文化人の向上が其内に於て遂げらるべき偉大なる有機體であつたが、Marx-Engelsに取つては國家は遂に抑壓機關たる以上に出でぬものであつて、人類の自由は國家の内に於て實現せられるものでなくて、その國家から脱却したとき、國家の消滅した曉に於て、始めて遂げられるものである。國家の下に於ては自由はない。「自由と云ふことを云ひ得るに至るや否や、國家は國家としては存立しなくなるのである。」國家の死亡と共に人類の前史は終り、人は其時始めて「必然の國から自由の國へ」躍出し、其曉に始めて「各人の自由なる發展が全員の自由なる發展の條件」となるのである。

マルクシズムを漫然國家社會主義と稱することの如何に不正確の解釋なるかは上に記すところに由つて明かにせられたものと思ふ。而して此點はマルクスの國家論と同じく Hegel の影響を受けて、終に Hegel を脱却しなかつた Rodbertus 及び Lassalle の社會主義説と比較することに由て一層顯著ならしめることが出來るのである。

（八）

Rodbertus 研究の權威たる H. Dietzel は、一社會觀の中心をなす倫理的根本規範を、個人は全體の爲めに存在するもので、之を社會的有機體の機關と認めなければならぬと斷定する社會的原理 Sozialprinzip と、國家は個人の爲めに存在するもの、國家及び法律は個人利害の隷僕たるべきものと斷定する個人的原理 Individualprinzip との二つとなし、社會的原理を極端まで追求する學説を社會主義と總稱して、個人的原理を追求する共産主義と相對立せしめ、（此の社會主義共産主義の區別が Dietzel 獨特のものであることは言を俟たぬ）而して Rodbertus を最も徹底的なる社會主義の主張者として、佛蘭西革命の思想（自由平等）が基づく他の樣々の社會主義者に對せしめて居る（Dietzel, Rodbertus, II. Abt. 1888, 29-32）。詢に Rodbertus の嘗て一手稿に記すところに據れば、國家は「個人の幸福の爲めに存在するものではなくて、個人こそは國家の精神的道德的並に經濟的福祉の爲めに奉仕すべきものである。」又個人は、歴史の精神の爲めに、國家社會人類の進歩の爲めに政治のそれに加工すべき材料であると謂ふ（Dietzel, a. a. O. 64）。Rodbertus に從へば、當さにあるべき國家は

社會體の中心組織であるが、抑も組織と云ふ組織の本質は、部分の適合調和であつて、各部分は全體の生活に關係し、自餘一切の部分の行爲と交互作用をなす一定の職分を果たさなければならぬものであるから、國家は集中的となり、分業的となるに從つて益〻完全のものとなるのである。Schelling 及び Hegel の國家學説に於けると同じく（Rodbertus は或場合には此二家の説を殆ど文字通りに踏襲して居ると云ふ）Rodbertus に取つても國家其自體を目的とするものである。「詭辯的にして且つ無意義なる國家目的論」は默すべきである。「國家は……歴史上に於てたゞ神的目標（göttliche Ziele）のみを追求して、何等の目的 Zwecke は追求しない。目的はたゞ人間のものたり得べきもので、同時に國家を墮として……人間の製作物たらしめるからである」と云ふ。（Dietzel, 47）

（九）

Rodbertus と Marx との見解の相異は右の一節に由つて知ることが出來るが、更に Lassalle を取つて其國家觀を Marx-Engels の夫れと比較すれば、一方の國家禮拜（Staatskultus）と他方の國家否認との愈〻顯著なる對照を見ることが出來る。それは Lassalle が一方に於て Marx の影響を受けて、既往一切の歴史を階級支配の交代連續と認め、更に第四階級の解放と共に一切の階級的對抗、階級的軋轢は撤廢せられて、調和、一致、愛の實現を見ることが出來ると説きながら、その階級敵對の廢せられたときは國家の消滅するときではなくて、却つて國家がその文化に對する眞使命を行ふことの出來るときであると説いて居るからである。

Lassalle の國家觀を云ふものは、その Arbeiterprogramm 1862 を引用するのが常である。（此小冊子は Lassalle が一八六二年伯林市外 Oranienburg の「手工業者組合」で先づ講演した説の後に印刷刊行せられたものであつて、講演せられた時の演題は Über den besonderen Zusammenhang der gegenwärtigen Geschichtsperiode mit der Idee des Arbeiterstandes であつた。）此書によつて吾〻は彼れの Marx から受けた影響と、他方に於けるその國家崇拜の思想とを最も善く窺ふことが出來るのである。その説くところの大要を摘記すれば大凡そ次の如きものである。

社會の歴史を觀るに、一の時代には必ず一の支配階級 herrschender Stand があつて其時々の社會の特色は、此の支配階級の何なるかに由つて定められる。中世の社

會に於ける支配階級は地主たる貴族僧侶であつた。地主は有ゆる點に於て權勢の保有者であつて、土地所有は中世の有ゆる制度、並に當時の全生活に其固有の特色を印したのである。然るに此間に地主階級の支配を覆へして社會組織を根本的に改造しようとする別の階級が新たに勃興して來た。資本家階級が是れである。此の新しい階級は一七八九年に到つて遂に革命を宣言した。併し社會の變革は革命に依つて造られたのではなくて、是れより先き徐々に行はれてゐた實質上の變化を革命はたゞ形式上に於て表明したに過ぎないのである。斯の如くしてブルジョワジイは、佛蘭西大革命以來名實共に社會の支配階級となつて、中世の社會に於て地主が政權を獨占し、又納稅の義務を免れてゐたやうに、選擧權の享有に納稅の資格の制限を設けることに由つて政權を獨占し、又間接稅を國家收入の大部分の財源とすることに由つて事實上課稅を免除せられて居るのである。然るに一八四八年二月二十四日を以て更に新しき時代の曙光は既に輝き初めた。即ち此日を以て佛蘭西に革命が起つて、勞働者を委員の一人とする假政府は、國家の目的は勞働者階級の境遇改善にありと宣言し、又普通選擧制を實施して、二十一歲以上の市民は財產の有無多少を問はず等しく國政に參與せしむべき旨を宣言したのである。一七八九年の革命の第三階級の革命なるに對して、今回の革命は第四階級の革命であつて、第四階級は今獨立して其原理を社會の支配原理たらしめようとして居るのである。（Ferd. Lassalle's Reden und Schriften, Hrsg, von Ed. Bernstein 1893 II. Bd.—）

それでは第四階級は、嘗て第三階級が貴族僧侶に取つて代つたやうに、自ら第三階級に代つて新なる專制支配の時代を現出しようとするものかと云ふに、Lassalleは第四階級と他の階級との間には重要の差別があることを認めて居る。第四階級は「社會の最終最極端の勘當せられた階級」であつて、地主資本家の如く新なる特權階級を形成すべき何等の排他的獨占的要素を有つてゐない。何等かの方法で社會の爲めに有用ならんことを期する限り、吾々は皆等しく勞働者である。從つて第四階級と云ふのは全人類と云ふのと同じである。「第四階級の自由は人類の自由、第四階級の支配は凡べての人の支配に外ならぬ。」されば勞働者階級の觀念（イデヤ）を社會の支配原理たらしめんとするものは、決して階級の分裂對立の爲めに叫ぶ

ものではない。それは調和の叫び一致の叫び愛の叫びであると云ふ。

勿論上に Lassalle の說くところが純粹のマルクシズムであるとは云へない。「勞働者綱領」は共產黨宣言のやうに生產力の發展が一定の財產法制の維持を不可能ならしめるところから起る社會革命の必然性を說明することが充分でないし、又ブルジョワジイが制限選擧制、間接稅に依つて自家の利益を擁護することに重を措き過ぎて居ることも、マルクシストの目には異樣に映ずることゝ思はれる。併し既往の歷史は階級支配隆替の歷史であつて、而して今勞働者階級は最下、最後の階級として自らブルジョワジイの支配から脫却せんが爲めには有ゆる階級鬪爭、有ゆる階級的壓制を一掃しなければならぬ地位にあることを力說する點に於ては Lassalle は Marx と同じ立場に立つて居るのである。Lassalle が第四階級の問題は人類全體の問題、第四階級の自由は人類の自由、第四階級の支配は凡べての人の支配である云々と謂ふのは、正に共產黨宣言が「プロレタリヤの運動は非常なる多數人の爲めにする非常なる多數人の獨立運動である。現社會の最下層たるプロレタリヤは公式社會を形成する上層諸階級全部が空中に破裂しなければ自ら起き自ら立つことが出來ない」と云ふのに相當する。然らば「上層諸階級が全部空中に破裂」した跡には何が殘るかと云ふに Marx の場合にはそれは國家ではなくて、生產者の聯合（アソシアチオン）に過ぎないのに、Lassalle の場合には其時始めて國家が「完成」の域に達し、始めて國家の眞使命が行はれるのである。